

周回遅れの映画評論

2007年2月13日

竹中 正治

「降伏しちゃいけないんですか? :映画“Letters From Iwo Jima”」



クリント・イーストウッド監督の映画“Flags of Our Fathers”との姉妹編“Letters From Iwo Jima”は、日本では昨年12月に封切られたが、米国では遅れて1月の封切りだった。私は帰国直前、1月にベセスダの映画館の先行限定封切り上映で見た。米国での封切りが遅れたのは、日本兵の視点から描いたこの映画の米国での人気に興行関係者が自信が持てなかったからかもしれない。しかし開けてみると高い評価を博し、アカデミー賞4部門で有力候補にあがった。

“Flags”は映画のメッセージとしては面白いが、ストーリーの展開がゴタゴタとしていて、作品の完成度という点では物足りない。一方、“Letters”はストーリー展開の緊張度でも上出来に仕上がっている。日本を描いたアメリカ映画を、我々日本人はほとんど常になんらかの違和感を感じずに見ることはできない。しかし“Letters”には、そうした違和感をほとんど感じない。戦中派の方が「イオウジマではない、イオウトウと呼ぶのが正しい」と指摘されていたが、戦後生まれの私には違和感にはならない。もし「監督は日本人だ」と言われれば、知らなければ信じただろう。主演の渡辺謙が「イーストウッド監督は日本人役者、スタッフらに任せてくれた」とどこかで語っていたが、それが良かったのだろう。

【戦闘を凄惨化した投降否定の軍律】

“Letters”が日本兵を通じて描く人間の苦悩は、登場する日本兵自身が映画の中で語る台詞に象徴されている。「祖国のため、天皇陛下のため、一命を捧げて戦う覚悟は俺にもある。しかし犬死にはしたくない。できることなら、家族のもとに生きて帰りたい。」若い一兵卒の主人公、西郷にこう告白した戦友は、この後米軍に投降する。しかし捕虜となった後、米兵の勝手な気まぐれで射殺されてしまう。

“Letters”と“Flags”の2つの映画を見ると、だれもそこに浮かび上がる旧日本軍と米軍の対照的なカルチャーの違いを感じずにはいられない。米軍は様々な逸脱があっても、原則的には兵

隊が生きて祖国に帰還することを大事にしている。戦闘不能になれば降伏、投降することは恥ではない。一方、日本軍は最初から滅私奉公主義で、命を捨てることが前提とされている。出兵する兵士に「無事に生きて戻って来ておくれ」という家族の本音を人前で語ることさえタブーだった。映画でも出兵する直前、主人公の西郷は若い女房と彼女が身ごもっている腹の中の子供に囁く：「今から父ちゃんの言うことは秘密だぞ。父ちゃんは必ず生きて戻って来るからな。」

日本軍の軍律では、銃弾が尽きて戦闘不能になっても降伏は厳禁であり、投降すれば非国民扱いとなる。だから万策尽きると、日本軍は「自決」するか「玉砕」するしかない。栗林中将は「安易な玉砕」すら禁じた。その結果、硫黄島に配置された約2万余の日本兵は、戦闘開始から約1ヶ月で組織的な戦闘が終わった後も、投降せずに地下壕にこもり続けた。この結果、小さな島であるにもかかわらず、米軍は日本兵を掃討するのに長い時間を要した。日本兵が潜んでいると思われる地下壕に海水を注ぎ、ガソリンを流し込んで火をつけるという、まるでネズミ駆除のような凄惨な「掃討」が行われたのだ。映画が描いているのは、栗林中将が死んで組織的な抵抗が終了する時点までであり、その後展開したこうした掃討活動は描かれていない。

映画の中で栗林中将は「本土への米軍の侵攻を一日でも遅らせるために最後のひとりまで戦うべし」と訓示する。絶望的な戦いと承知でも、兵士を鼓舞しなければならなかった栗林中将の苦悩が滲んでいる。昨年8月にNHKが制作、放映した硫黄島の戦闘に関するドキュメンタリー番組によると、硫黄島での日本軍の予想以上の抵抗で当初の想定を大幅に超える2万8000人もの死傷者を出した米軍はひとつの教訓を引き出したと言う。それは、日本本土上陸戦において、米兵の人的な損耗を最小限にするために、日本本土への徹底的な空襲を行い、事前に日本の攻撃力、戦意を削ぐことだった。こうして徹底的な東京大空襲や2個の原爆の投下につながった。戦争が生み出す運命はまことに容赦がなく、無慈悲である。

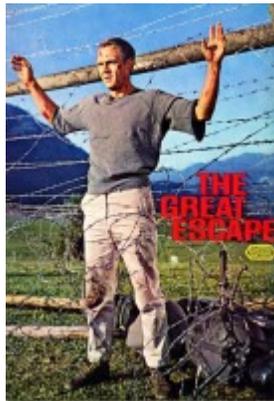
【捕虜になってもいいじゃないか。映画「大脱走」に見るアメリカン・カルチャー】

なぜ、旧日本軍は玉砕か自決のみで、降伏という選択肢を否定したのだろうか？こうした旧日本軍カルチャーと対照的な米軍のカルチャーが描かれた映画が「大脱走“The Great Escape”」(1963年)だ。スティーブ・マックイーン、ジェームズ・コバーン、チャールズ・ブロンソン、リチャード・アッテンボローなど、当時あるいはその後のハリウッドの代表的なスターとして活躍した俳優達が勢揃いしたこの映画、アメリカ人の中では「大好きな戦争映画」の代表作として金字塔的な存在である。

欧州戦線でのドイツとの戦いで捕虜となった米兵ら連合軍兵士達が集められたドイツの捕虜収容所で彼らは、「捕虜収容所から脱走し、敵地で後方を攪乱してやろう。成功すれば、敵地を脱し、祖国に帰還できる」と空前の規模の大脱走を企てる。戦闘不能になれば降伏し、捕虜になっても脱走することで抵抗し、最後まで生きて祖国に帰ることを諦めない執着と楽観主義。こ

の映画の最人気はスティーブ・マックイーンが演じるキャラクターで、彼は収容所から脱走を試みては捕縛され、それでも脱走、捕縛、独房、再脱走を繰り返す。捕縛されるのは悔しいが、決して恥とは思わない **Die Hard Guy** だ。「だって、生きてさえいれば、また脱走することができるだろう。」

実際、太平洋戦争でも真珠湾攻撃の直後に日本軍がフィリピンの米軍を攻撃した時、米軍は降伏し、数万人の米兵が捕虜となっている。アメリカのカルチャーと旧日本軍のカルチャー、もはや比べるまでもない。私は「愛国心」など教えられなくても十分にナショナリストのつもりであるが、1920年に米国人として生まれるか、日本人に生まれるかと問われれば(太平洋戦争勃発の1941年に21歳)、間違いなく米国人を選ぶ。



逃げ道を塞がれ「投降」するマックイーン

【なぜ降伏を禁じる軍律が支配したのか？】

なぜ、旧日本軍は戦闘不能となってまでも降伏を禁じたのか？「主君のために忠義を尽くし、命を投出す」という「武士道」の文化的な背景を指摘する方がいるかもしれない。しかし、良く考えて頂きたい。戦国時代までの武士階級一般は、自分ら一族が生き延び、出世することを最優先に考えるプラグマティストで、場合によっては日和見主義的でさえあったのだ。仕えている主君が弱い、凡庸と見れば、見限り、敵に寝返るのは普通のことだった。攻める側も敵の家臣団に対する調略で相手の力を削いだ後に、戦闘で決するのが常套手段だった。

「主君への絶対的な忠誠」というイデオロギーが支配的になるのは、戦闘がなくなった江戸期の産物でしかない。「武士道と云うは、死ぬことと見つけたり」の葉隠の一節は有名である。しかし、専門家によると、これとても死を美化する主張として理解することは、葉隠の全体を理解しない曲解であると言う。例えば以前紹介した丸山真男の「忠誠と反逆」はこの点で面白い視座を与えてくれる。儒学の流れを汲んで確立され、君主への絶対的な忠誠を前提とした幕藩体制下でも、「忠誠」という概念を徹底的に考え抜いた思想家の中に権威盲従的な「忠誠」を越える思索の痕跡を丸山は発見する。君主が大きな間違いを犯そうとしていると思った時、本当に「忠誠」を貫く家臣はどうすべきか？ 黙って君主に従い大過に至るのは、表見的には「忠誠」のよ

うであっても、本当の「忠誠」ではなかろう。命を賭して君主を諫めるのが真の「忠誠」ではないのか。その結果「謀反」と断罪されるかもしれない。自分の判断が間違っているかもしれない。しかし真に滅私奉公を貫徹するならば、「謀反」と呼ばれることさえ恐れるべきではない。このような「忠誠思想」の徹底的な思索の結果、「謀反」、つまり今で言う「体制批判」「体制転覆」の思想を内在した思索の痕跡を丸山は掘り起こしたのである。

しかし、明治に天皇を頂点とする中央集権国家のイデオロギーとして作られた「軍人勅諭」「教育勅語」を基点に、「滅私奉公、忠君愛国」は絶対主義的な進化を遂げてしまった。自由民権運動や大正デモクラシーなどの発展はあったものの、昭和になると全体主義の力が勝った。武士道に関する都合の良い解釈が旧日本軍で軍隊教育に利用され、玉砕や自決を美化するために使われた。つまり投降否定は古来の武士階級の文化とは係わり合いのない、旧日本軍、あるいは日本軍国主義時代の産物であるとして考えるべきなのだ。

【投降否定の背後にある国家観】

「降伏否定、玉砕、自決」や兵士の損耗を顧みない体質を生み出した原因は私が考える限り次の2つである。まず、降伏を否定した旧日本軍の思想背景と米軍のそれを比較すると、2つの国の国家観の相違に辿り着く。米国の民主主義を理想化、絶対視する気はないが、少なくとも個人主義を基本にした民主制国家で、元首としての大統領は4年に一回の国民選挙で選出される政体だ。一方、軍国主義時代の日本では、天皇という君主あつての国家であり、国民は君主に尽くす臣民である。

前者の政体では、国民の支持、士気を維持するためにも兵士を帰還させることを原則に運営されるのが自然な理だ。“Flags”では、硫黄島の戦闘で予想以上の死傷者が出たことに米国政府や軍首脳部が衝撃を受け、政権は有権者の戦争支持の低下を心配する事情が描かれていた。そのダメージを挽回する政治的な演出のために **Flags Raisers** は英雄に祭り上げられたのだ。一方、後者にあつては、「臣民は君主に尽くし、君主は臣民を慈しむ」というある程度の互惠関係はあり得ても、危機存亡の時となれば「君主あつての国家」という国家論理が全面的となり、臣民の命は消耗品でしかなくなった。

更に2つめの原因として、旧日本軍の物理的な劣勢が考えられる。第2次世界大戦当時の軍事技術的な水準を前提に兵士の損耗を最小限にしようとするれば、例えば陸戦ならば兵士数名毎に戦車の援護を付けることになる。敵地に侵攻した歩兵は、攻撃を受けると戦車を盾に防御し、戦車の主砲で敵の攻撃力に打撃を与え、その後歩兵が突入して制圧するというのが常套戦術である。しかしそれだけの数の戦車の供給には莫大な産業的生産力が必要となり、第2次世界大戦当時の日米ではこの点での優劣はあまりに大きすぎた。特に大戦後半期には、陸海で重火器、船舶、航空機の圧倒的な劣勢の下に旧日本軍は作戦を展開せざるを得なかったのだから、「大和魂」のみを強調する精神主義的偏向に傾斜したのはある意味では必然的だったろ

う。軍事的な劣勢のために、多くの兵士を帰還できる見込みのない戦闘に駆り立て、そうした作戦を正当化するために、命を投げ捨てる滅私奉公が益々美化されたのだ。自国兵士の損耗を最小限にする作戦は、米国の物理的、経済的な優位の上に可能だったとも言える。劣勢にある集団ほどメンバーに自己犠牲を求め、それを正当化・美化するイデオロギーを喧伝するものだ。今日ではイスラムの自爆テロにそうした例を見る。

【塞翁が馬、皮肉な因果】

言うまでもなく、こうした旧日本の国家観は、敗戦と新憲法により**180度**逆転された。国民が主権者であり、象徴としての天皇の地位は「主権の存する国民の総意に基づく」と規定された（もっとも国民ひとりひとりが現在の天皇の地位に賛否を表明することはないのだが。）戦後のこの国家観の反転と「戦争放棄」の平和理念の結果、日本は原理的に「国民の命を犠牲にできない国」になり、実際**60年**以上も戦争に直性関わったことのない稀有な経済大国となった。

一方で、米国は戦後世界の覇者として、大きな戦争だけで、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガン・イラク戦争を経験した。自国兵士の損耗を最小限にしなくてはならない「民主主義帝国」米国は、超高度のハイテク兵器を開発し、極めて僅少な自国兵士の損耗で敵対政権を打倒することまで可能となった。ベトナム戦争では米兵の死者は**5万8000人**だったが、**91年**湾岸戦争での米軍死者は**146人**に過ぎない。もしこの**91年**湾岸戦争での対イラク戦圧勝の経験がなければ、あるいはイラクのフセイン政権打倒のためにベトナム戦争並みの数万人の米兵の命が失われるかもしれないと認識されていたならば、米国の選択はどう変わっていただろうか。アフガンのタリバン政権打倒はともかく、戦争をイラクまで拡大することは起こらなかったかもしれない。たとえ**9・11**テロの後でも、米国民はあれほど対イラク戦争支持、ブッシュ政権支持には傾斜しなかったのではないだろうか。

自国兵の損耗を最小限にして戦争を遂行できる超ハイテク兵器が、米国の対外戦争のハードルを低くしてしまったとすれば、これもまた皮肉な因果だ。超ハイテク兵器で政権は倒壊させることができても、宗派、民族の分裂する地域に新しい安定政権を確立することはできない。米国は古い形態の戦争とは異なる形で高いコストを払うことになってしまったのだ。

以上